

# プロジェクト報告書

## 1. プロジェクト名/チーム名/メンバー

「南海沿線ガイドをつくるプロジェクト」

チーム名：なんかいいところ探し隊

メンバー：有吉裕梨、福路世椰、前川東吾、松山響汰、山崎航

## 2. 背景・目的/目標

和歌山大学前駅は、平成 24 年 4 月 1 日に南海電鉄では 18 年ぶりとなる新駅として開業した。その後、平成 26 年 10 月 28 日より特急「サザン」の停車駅として加わり、これまでよりも遠方から通学する学生が増加した。なんばから和歌山大学前までの小一時間、車内より車窓を眺めると、工業地帯から田園風景、さらには海岸線と、実にさまざまな風景を目にすることができる。しかしながら、誰も途中駅で降りようとはしない。定期券を所有していれば、運賃を気にすることなく途中下車することができる。和歌山大学へ進学し、これまでの受け身の教育から、自ら進んで学ぶ場へと変わった。地域を理解し、その魅力を発見するには実際に足を運ぶ必要がある。そこで、われわれが南海沿線のガイドマップを作成し、多くの和歌山大学生と共有することで和歌山大学生の行動範囲を広げることを目的とした。

また、近年の情報化社会にふさわしく、さらにはより手軽に多くの和歌山大学生と共有できるよう、紙媒体でのマップではなく、web 上で共有できるようにすることを目標とした。最低目標として、マップを作成すること、標準目標として、web 上で共有することを設定した。また、現地調査で撮影した画像や動画を利用して、動画を作成し、動画共有サイトにて動画を共有することを最高目標として設定した。

## 3. プロジェクトの内容

### 3.1 編集地域の選定

当初の計画では、特急「サザン」停車駅をとりあげると計画していたが、メンバーからの「各駅停車のみが停車する駅を編集した方がおもしろいのではないか。」という意見があり、編集対象駅を当初の計画から変更し、「各駅停車のみが止まる駅」へとすることが決定した。

また、南海電鉄が発行する既存の情報誌との差別化を図るため、有名観光地や特産品をとりあげるのではなく、「学生目線でなんかいいところ」をテーマに掲げた。

### 3.2 現地調査

編集対象となる駅が決定すると、事前に下調べの上、現地調査を行った。確かにインター

ネットで検索すればさまざまな情報を手にすることができ、それだけでも十分な記事が書けるであろう。しかし、テーマが「学生目線でなんかいいところ」ということもあり、実際に足を運んでみて気づくその地域の魅力が多々あった。

また、マップの編集は専門的な知識を要するため、その知識を持った人でしか編集作業を進めることができなかつた。そこで、編集担当者の負担を軽減させるため、これまで等分していた現地調査を見直した。



図 1. 現地調査で得た情報を共有する様子



図 2. マップの編集方法について話し合う様子

### 3.3 編集作業

現地調査が終了すると、原稿作成班、マップ作成班、動画編集班に分かれ作業を進めた。それぞれの班で作業したが、情報を常に共有できるように週 2 回会議を開き、また、トークアプリを利用して細かな情報も洩れなく共有した。

編集作業においては、作業工程を細分化し、期間内にその工程を完成させることが可能であるかを常に確認することで、期日内に、かつ、スムーズにプロジェクトを進めることができ、無事に完成させることができた。

## 4. プロジェクトの成果

本プロジェクトを遂行するにあたり、地域を再発見することに対するさらなる探求心が生まれた。南海電鉄には本線の他に歴史ある高野線も所有しており、メンバー内では「高野線についても取材したい。」という声があがっている。

また、社会的成果として、マップ、および動画にたくさんのコメントが寄せられている。ある男性からは、「自分の住む地域をぜひともとりあげてほしい。」や、「自分も実際に行ってみたい。」というコメントをいただいた。和歌山大学生だけでなく、地域の人々の行動するきっかけとなっているといえよう。



図.3 完成した沿線ガイド

## 5. 今後の課題

マップに関して、文字数が多く、見にくいという意見があった。当初の計画では A3 用紙 1 枚という用紙設定をしていた。これはもし紙媒体として配布するなら最適な用紙だと判断し設定しており、文字数もこれに準じたものとしていた。しかしながら、コンピュータやスマホの画面に表示するには文字数が多く、拡大しないと読めないという状況になった。計画段階において、紙媒体としないからこそその用紙設定をすることが課題として考えられる。

現地調査においては、一つの駅を一人が調査するという方式を採用したが、複数人で一つの駅を調査した方が、より多くの発見があったのではないかと指摘があった。季節柄、日程を調整しづらいという側面もあったが、確かに複数の方が調査も円滑に進み、意見交換も頻繁に行われたであろう。そういった意味で、調査方法についても課題があると認められる。

## 6. まとめ

常に情報を共有し、意見も言い合うことができた。だからこそテーマの変更や現地調査の作業量見直しなどを行うことができた。各々の長所を活かし、メンバー全員が全力で本プロジェクトに取り組んだからこそ、期日内にここまでのもので完成した。個々のメンバーがどう動くか、また、どうまとめるか。チームマネジメントとはそういったことを吟味することが必要不可欠であり、また、そういった能力は、この先社会においても必要なことといえよう。しかし、チームを構成しているのは一人ひとりのメンバーであり、お互いがお互いを理解し、信用しているからこそプロジェクトは成功するのだと思った。